生きることと見つけたり-亀山先生のこと-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立野, 正裕 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13939

生きることと見つけたり――亀山先生のこと――

立野　正裕

わたしは三十数年のあいだ英米文学専攻で亀山照夫先生の後輩同僚として過ごさせていただいたが、先生に関していちばん印象的に思い出されるのは、三十年前のある日、先生が授業中に脳梗塞で倒れられてから、やがて教室に復帰されるまでの日々のことである。

人事不省の状態のまま先生が最初に搬送された病院の医師は、先生の容態を見るなり残念ながら手遅れですと言ったそうである。夫人はすぐさま先生を別の病院に運んだ。助かりますよと二番目の医師は言ったそうである。その医師の診立てどおりだった。先生は一命を取り留められた。いっぽう、この間に研究室の同僚たちに届けられる情報は錯綜し続け、助からないと助かるとのあいだで刻々揺れ動いた。われわれは文字どおり一喜一憂を繰り返したのである。

先生が意識を回復されてからしばらくして、同僚数人とわたしは高島平にある病院に見舞いにうかがった。先生はベッドに起き直っておられた。個室ではなく、八人ほどの大部屋だった。われわれの顔を見るなり、ぼくはもうだめだと先生はおっしゃった。話のあいだ、隣のベッドの患者さんと見舞いにきた客との言葉を、ご自分に話しかけられたものと勘違いされたりすることがあった。先生の右手は麻痺して動かず、左手で右手を引き寄せながら、ね、こんな状態にぼくはなっちゃったとつぶやかれた。しかし、いっしょに行った同僚の一人は、病院からの帰り際わたしにこう言った。

「亀山先生はまだご自分の状態に困惑しておられるけ

れども、やがてお元気になられますよ。ぼくも数年前に心臓を手術した直後はすっかり気落ちして、元気が出るまでに時間がかかりました。もう自分はだめなのではないか、もう終わってしまったのではないかと考えて、かなり悲観的な気分にもなりましたが、その後なんとか立ち直りましたしね。亀山先生だって、もう少ししたら元気になられますよ。」

この同僚は鈴木益夫さんといってわたしとほぼ同年だったが、生まれつき心臓に欠陥があって、大学に入ってまもなく手術を受けた。療養に時間を要したため、学年はわたしよりも三年か四年下であった。

「手術はうまくいったけれどもぼくは三十五まで持たないでしょう。医者にあらかじめ引導をわたされていますよ。」

と日ごろ言っていた。それでもいっしょに酒を飲んだ。彼はウィリアム・フォークナーの研究を志し、わたしもこの作家が好きだったので話が合い、おまけに同じ職場だから語り合うこともたくさんあった。「人生とは死ぬことと見つけたり」というのが口癖で、飲むと『葉隠』をもじってよくそう言った。三十五歳を過ぎても死なない自分に驚いていたが、約十年後に心不全のためとうとう亡くなった。四十代なかばであった。

亀山先生は鈴木さんとは逆であった。むしろ、人生とは生きることと見つけたりというふうに考えて、これまで生きてこられたのではないかとさえわたしは思う。そのことをもう少し詳しくここに書きたい。

*

病気前の先生はつねに颯爽として疾風のようだった。上背があるから階段を三段ずつ上り下りし、おそろしく早口で語られる方だった。あることを話し始めると、それが終わる前に次の話が始まる。先に話していたことを自ら追い立て押しのけるかのように、次の話を進められた。階段の上り下りも三段ずつだったが、話し方もまさに三段ずつ飛ばすかのようであった。先生、待ってください、そのことですが、わたしの意見では……とわれわれが言っても話はすでに別の話題に移っている。冗談のうまかった鈴木さんが、あるときわたしと飲んでいて、カメさんの三段跳び論法にはウサギもびっくりでしょうねぇ、と言ったくらいである。

だが退院後、先生の右半身には麻痺が残った。そのた

めステッキをお使いになり、話し方もテンポが緩くなった。字を書くのに右手を使うことができないので、左手で字を書くことを余儀なくされた。あれほど青年客気だった先生だが、三段の階段を上り下りするにも以前の三倍時間をかけ、小さな話をするのにも従前の三倍の時間をかけられるようになった。

だが、病気の前後を問わずまったく変わらない面もおありだった。われわれ後輩の書いたものが先生の目に触れるとかならず批評なり感想なりがきたことがその一つである。たとえば『文芸研究』に書いた拙文で先生の目を通っていないものは一つもないであろう。肯定的なこともあれば否定的なこともあったが、つねになんらかの意見を率直に言ってわたしたちを鼓舞してくださるのだった。

また、三十数年のあいだに交わした先生とのおりおりの対話のなかにも、忘れがたい話題がいくつもある。教授会の前後などに先生の研究室に入り込んで、ナサニエル・ホーソーンのこと、ハーマン・メルヴィルのこと、ヘンリー・デイヴィッド・ソローのこと、イーディス・ウォートンのこと、ウィラ・キャザーのこと、マーク・トウェインのこと、ジャック・ロンドンのこと、アーネスト・ヘミングウェイのこと、ジョン・バースのこと、ジョイス・キャロル・オーツのこと、そして鈴木さんが亡くなってからはフォークナーのことも、わたしはよく先生と語り合った。むろん多くの場合は、語り合うというよりもわたしが聞き手であって、先生からいろいろと教えていただくわけである。

話の合間に書棚からそれらの作家の著書や研究書を先生は取り出されて、自分はもう読んでしまったから、これからはむしろ立野くんに役に立つだろう、持って行きなさい、と言って惜しげもなく貸してくださることも少なくなかった。わたしが拝借を願い出た本もあるが、その場合も帯出を断られたことはいちどもなかった。

それどころか、親しかった鈴木さんがいなくなってしまってからは、亀山研究室がいわばわたしのアメリカ文学小図書館だったと言ってもいい。古書店でも入手がむずかしいアメリカ文学の優れた研究書や評伝を、わたしは何冊先生からお借りして読むことができたことだろう。しかもご退職に際して、それらのうちの数点を、いわば「置き土産」として先生はわたしにくださった。

しかし、わたしが亀山先生にほとんど畏敬の念に似た気持ちをいだかずにいられなかったのは、やはり病気を

されてからの先生の行住坐臥を後輩同僚として見ていたからであった。階段の三段跳びも座談の三段跳びもすっかり影をひそめた代わり、先生にはなにか、人生のなかに待ち受けるものへの用心というか、謙虚さのようなものがそなわるようになった。そういう先生を見ていて、わたしにはしばしば、坂口安吾が『青春論』に書いているある話が思い出された。安吾はそれを肺結核にかかった友人から完治後に聞いた話として紹介している。だから先生の場合には当てはまらないわけだが、連想を強くうながすものがそこにあることには変わりがない。

*

肺病というものは、病気を治すことを人生の目的とする覚悟ができさえすれば治る病気だ、と坂口安吾の友人は語ったそうである。他の人生の目的をいっさい断念して、病気を治すことだけを人生の目的とし、絶対安静を守る。そうすればかならず治ると言ったそうだ。

その話を聞いたあとで小田原に移転した安吾は、近所合壁みんな肺病患者だらけという環境に置かれている自分に気がついた。彼らの大部分の人たちは、他のいっさいを放擲して治病をもって人生の目的とする覚悟がないらしかった。なにかしら普通人の生活が抜けきれず、中途半端な闘病生活をしていることが見て取れた。さほど重症とも思われぬ人たちが、読書に耽ったり散歩に出歩いたりしているうちに、バタバタと死んでしまったという。彼らは療養のかたわら本を読み、絵を描き、日々の無為とたたかおうとする。それがせっかくの精力を中途半端なかたちで使い果たす結果を招いてしまう。

いっぽう、安吾の友人のようにもっぱら病を治すことだけに専念する患者も少数いる。彼らは生活のすべてを治療だけに向けて建て直し、治療以外のことへの欲求を徹底的に抑制する。亀山先生の行住坐臥にわたしがうかがうことができるように思ったのも後者であった。

あるいはこの連想は、前者に鈴木益夫さんのイメージを重ねて見ていたからわたしに生じたのかもしれない。皮肉なことに、安吾の『青春論』をわたしに紹介してくれたのは鈴木さんだった。人生とは死ぬことと見つけたり、という言葉を座右において生きていこうとしていた鈴木さんは、『青春論』のなかに言及されている勝小吉の『夢酔独言』をことのほか愛読するふうでもあった。勝夢酔の無頼な生き方には生への未練というものがなく、

いつでも死ねるという確乎不抜、大胆不敵な魂を感じさせると安吾は書いている。まさにそれがうらやましいと鈴木さんには思われたのだろう。

これに対して、同じ『青春論』のなかのくだりで言えば、亀山先生に似合いそうなのは、むしろ宮本武蔵の生き方である。といっても青年客気の武蔵ではない。安吾が描いて見せる武蔵は全然剣豪なんかではない。小心翼々として生きることにこだわりとおしただけの男である。ただただ生き延びたいためだけに勝負を考え、それを実行して憚らなかった男である。武蔵にとって人生とは、生きることと見つけたり、なのだ。だがわたしは安吾の偶像破壊的な武蔵観をおもしろいとは思うものの、その解釈を採らない。亀山先生にはどこか、人生のなかに待ち受けるものへの用心というか、謙虚さのようなものが感じられるようになったとわたしは書いたが、武蔵は若年にしてそれを身につけることができた剣客だった。亀山先生は三十代で脳溢血の発作で倒れ、いちどは医者に見放されながらも生還を果たした。夫をむざむざ死なしてなるものか、という夫人の粘り強さと愛情に満ちた期待に、先生は応えられた。愛ある人々への最高の返礼が、生きて生き延びることだった。

人間はときならず不運に見舞われることがあるし、しかもそういうことは人生にしばしばある。だから不運自体はけっして珍しいこととは言えない。しかし、不運に見舞われてそのまま屈してしまわず、不運を自己に突きつけられた現実として受けとめ、そのうえでその現実に立ち向かい、ついに乗り越えてゆくことができる人々は、やはり稀有の存在と言わねばならない。

発作に見舞われたあと、かつての颯爽とした姿を失い、階段の三段跳びも、三段跳び論法も、ともにあきらめることを余儀なくされた亀山先生は、代わりになにか海底を歩く人のようなおもむきを帯びられた。さながら人生の底を見つめながら歩く人のような沈着さを身につけられた。

人生とは生きることと見つけたり、という教えをわれわれに残して教壇と研究室からゆっくりと歩み去って行かれた先生のご長命とご自愛を、わたしは切に祈って已まない。